

2024年10月1日

第19回 ORION 会議 議事録

日時：2024年9月28日（土） 15：15～17：00

現地会場：岡山大学病院 総合診療棟2階 カンファレンスルーム2/オンライン併用

参加者：《五十音順》

上原 健司先生（岩国医療センター）、大橋 一郎先生（川崎医科大学総合医療センター）、奥 格先生（岡山赤十字病院）、川西 進先生（津山中央病院）、熊野 夏美先生（岩国医療センター）、斎藤 智彦先生（岡山ろうさい病院）、佐藤 哲文先生（国立がん研究センター中央病院）、谷西 秀紀先生（岡山赤十字病院）、築地 崇先生（高砂市民病院）、戸田 成志先生（香川労災病院）、難波 研二先生（岡山済生会総合病院）、平崎 盟人先生（香川県立中央病院）、前島 亨一郎先生（川崎医科大学）、山岡 正和先生（姫路赤十字病院）

森松 博史、清水 一好、松岡 義和、岡原 修司、佐倉 考信、篠井 尚子、木村 貴一、松岡 勇斗、中村 美香、宮中 桃子、安田 寛子、山下 香織、成谷 俊輝（文責）

～協議事項～

(1)「全身麻酔の覚醒時興奮に関するパイロット研究」(篠井 尚子)

【要旨】

覚醒時興奮に関するパイロット研究を開始した。覚醒時興奮は全身麻酔から意識が回復する過程に限定され、せん妄とは区別する必要がある。成人の覚醒時興奮は、せん妄との混同や確立していない評価基準のため、発生率や関係因子がはっきりしていない。そのため、当院での発生頻度を調査し、周術期のリスク因子を推測する。7月に当院で全身麻酔下成人予定手術患者を対象として1か月間、覚醒時のRASS調査を行った。覚醒時興奮の発生率は428例中77例(18%)であった。今後、電子カルテよりそれぞれの患者因子・手術麻酔管理に関する因子に関して覚醒時興奮の発生率を比較し、覚醒時興奮のリスク因子を検討する予定である。

(2)「食道癌術後患者におけるアクチグラフを使用した睡眠の質および離床の評価：前向き観察研究（ACT study）」(木村 貴一)

【要旨】

当院における食道癌術後患者の睡眠状態について調査した。2023年7月から2024年3月までの間に当院で食道切除術を受けた20症例を対象とした。主要評価項目は術後4日間の主観的指標としてRichard-Campbell-Sleep-Questionnaire(RCSQ)を用い、副次的評価項目として術後14日間アクチグラフで測定した睡眠指標を用いた。主観的睡眠評価の点数は低く、術後14日目の時点でも経時的な改善を認めなかった。アクチグラフで計測した総睡眠時間、夜間睡眠時間ともに経時的な減少

傾向を認めたが、日中の睡眠時間割合も減少していた。今後の課題として、経時的な睡眠時間のトレンドをどのように解析するか、及び今後の研究についての方向性が挙げられる。

(3)「下肢人工関節置換術における心拍変動解析モニタリングを使用した術中鎮痛管理群と非参照群との術中麻薬使用量に関する前向き無作為化対照試験」(松岡 勇斗)

【要旨】

HFVI ; High Frequency Variability Index とは、心拍変動解析によって得られた周波数のうち副交感神経活動の指標となる高周波成分を元に数値化した無単位指数で 0~100 で表示され、快適性が高まり副交感神経活動が活発になると数値が上昇する。下肢人工関節置換術における HFVI を使用した術中鎮痛管理群と非参照群との術中レミフェンタニル使用量に関する前向き無作為化比較試験について発表した。9月27日現在の進行状況としては、36%の到達率(18名同意取得/50名予定)で予定通り進行中である。本研究は HFVI が疼痛管理に有用であることを示すための Pilot Study である。その一方で、術中全身麻酔下における有害反射とは交感神経と副交感神経のバランスの結果という見方もあり、その介入にオピオイドが必須かどうかという新たな Clinical Question も生まれた、まずは本研究の結果が待たれる。

■アナウンス

- 森松)・覚醒時興奮の研究はパイロット研究としてうまくできている。術後せん妄との関係を調べるのも興味深い。
- ・客観的な睡眠の評価と主観的な評価が異なることがわかった。睡眠薬が患者満足度の上昇につながっていない可能性がある。今後アクチグラフが睡眠状態の評価になる可能性。
- ・HFVI については、膝関節と股関節の2種類の手術があることについて、症例数は少ないがサブグループを行う。またランダム化しているため両群同じ数になるため影響は少なくなるだろう。
- ・次回開催は 2025 年春の予定。

以上